
生存率 1 / 2 のサバイバル

パリジェンヌ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生存率1／2のサバイバル

【NZコード】

N3824Q

【作者名】

パリジェンヌ

【あらすじ】

白鳩高校生徒、薄井直哉と中村希、中島田熊、直木太志の4人組は生存率1／2の勝つか負けるか、生きるか死ぬかのサバイバルに明け暮れていた・・・はたして生き残るのは誰なのか・・・

「おい、アレやううぜ」「

クラス一のデブ、直木太志が言った

「俺今日あんま金持つてないんだが」

田ごろからクールを気取つてゐる天パ野郎、中村希が答えた

「まあ僕はどうせまた勝つから別にいいけど」

希の背後からオタク野郎、中島田熊が割り込む

「よーし、薄井、お前は?」

直木が俺に尋ねた

「ふん、いいだろう」

俺の名は薄井直哉

長身に爽やか短髪、元野球部エースの男子高校生だ

おつと、そんなことよりも「アレ」とやらの説明をしないとな

まあ簡単に説明するとパシリゲームみたいなものさ

ジャンケンをして一番負けのやつが他の奴の注文したものを自腹で

買いに行く

悪魔のようなゲームだがこいつらはギャンブルに賭ける青春も悪く

ないつて輩ばかりなのさ

言つておくが俺と田熊は一度も負けたことがない

つまりは勝率100パーセントってわけだ

希もなかなかの強運の持ち主らしく数えるほどしか負けたことがない

特筆すべきなのは太志だ

コイツが勝つた時は食費が洒落にならんから地獄を見るが大体この

勝負で負けるのはいつもコイツなのだ

自分の食費を浮かせるために言いだすわけだがいつも負けてばかり

で結局は金銭的な面から自分の食事を減らしている

ダイエットとか言つてゐるがただのアホだと俺は確信している

「さて、始めるか」

太志が席を立ち俺たちもそれに続き立ち上がる

全員が立ち上かりやる気が感じられたと」「もとで希が言った

- ひじり し くそ

「……リーリーパーリ

田淵の晝抄

詩經 卷之二

太志がグー

希がグー

田熊がパー

俺がグー

一
や
た
ね

田熊が嬉しそうにノモを取り出し注文を書き上げる

「お前は勝った」

「次女庵」

モード別

「ふん、勝負はこれからだ」

俺は相手の一人を睨みつけると掛け声をかけた

「じゃんけんぽん！」

俺たちは優越感に浸っている田熊を尻目に拳を振った

結果は

大志がケン

卷之二

太志がガツツボーズを喝^{ハグ}叫^スび

クラスの他の奴の視線が痛い

「へいじいがれや」

太志がメモを取り出す

「おいおい何だその厚さは・・・」

希の顔が引もいN&

「何って注文のメモだけど」

「既に里へ廻へ

田熊が次の勝負を

「オーケー、やつてやるうじさん」

卷之三

先に書いておく。俺の注文はピザケヤベトスカツサンドとシバング風フレンチフライのサイズにミルクティーダージリンセレクションンボリコーム3種だ。

俺は希に注文を突き付けた

備かそれを置く必要はない。

卷之三

俺たちはそう叫ぶと振りかぶつた

—じゅんけんほん！！

卷之三

希がパー

俺がバ
ー

二二九

あまりの緊迫感に息を切らした希が、

ふん、前のお前ではないようだな

「やっぱカレーだけじゃなくてカレーうどんも頼もう」

それを尻目に太志が注文を書き足す

田熊も呆れ顔だ

ん？

ふと尻ポケットに手をやつた俺は違和感を覚えた
そこにはあるはずの物がないのだ

普段から鞄にはしまわないからここにあるはずなのだが
そう言えば昨日放課後にコンビニで菓子を買ったな
そのあとは直帰してすぐに寝たはずだが
はつ！

そう言えば菓子買ったときに財布をそのまま菓子を入れてもらつた
ビニール袋の中に一緒に入れたんだ！

そしてその菓子は今も自宅の机の上だ
これはまずい

今の俺は一文無しというわけか・・・
これがバレたら何を言われるか・・・
それにいまさら引くことも出来ない・・・
どうする・・・俺

「どうした？手が震えているようだが」
希が笑みを浮かべている

「武者震いつてやつぞ」

そう答えた俺は思った

解決法は一つ

勝てばいい

それ以外の選択肢は俺はない
勝利以外の選択肢は俺には似合わない
ここは少し慎重に行かせてもらつとしよう

希の一手目はグーだ

そして二手目はチョキ

三手目がパー

偶然にも俺が出した手と全てかぶつている
ジャンケンの手の順番と言えば童謡でも歌われているよう^ヒ「グーチ
ヨキパー」が一般的な順番だらう

希はそれにあやかっているのだろうか

少なくとも俺はまったくの偶然でこの手になつたわけだが
ふむ、探りを入れてみるか

「お前・・・次何だす?」

「は?」

俺の問いに希は驚いたようだつた

「んーじゃあグー」

希は疑うような顔で俺を見据えると答えた
やはりな

希は順番で手を出しているようだ
そして次もグーを出すと宣言した

だが、これは奴が正直者だつたらの話だ
騙し騙され、死ぬか生きるかのこの世界
それはまずないだろう

やつはチョキかパーを出す

そして先ほど「あい」になつたであろうパーを再び出す可能性は低い
つまり俺がグーを出せばチョキを出した希に勝てるわけだ
だがパーを出される可能性がゼロというわけではない
そこで俺は奴がパーを出す可能性をゼロにする一言を言つんだ
「天パだからパー出すかと思つたわ、天パのパー」

俺は挑発するように希に言つた

「寝言は勝つてからいいな」

少し勘に触つたのかぶつきらぼつた希が言つた

「んじやあ、いくか?」

俺たちは再び構えた

「じやんけん・・・ほん!..」

俺は野球のボールを投げる時のように手首のスナップを利かせ華麗
にグーを出した

結果は・・・

希がグー

俺がグー

再びあいこだ

な・・・なんだと・・・?

こいつ・・・俺の予想の範囲を超えてやがる・・・
まさかここで馬鹿正直にグーを出してくるとは・・・

この俺としたことが裏を読まれたか・・・

「ふう、あぶねー」

希が額の汗をぬぐう

「はやくしろよー腹減つてんだよー！」

太志が叫ぶ

「昼休みはそう長くないよ

田熊もしごれを切らしていいようつだ
落ち着け、落ち着くんだ薄井直哉

周りからの雑念に惑わされるな

俺は深呼吸をすると目を閉じ再び考えた
じやんけんの勝率は一分の一だ

あいこはカウントされないとして、勝つか負けるか、それだけだ
奴は・・・希はグー、チョキ、パー、グーの順番で出してきている
ほぼ確実に奴は順番で手を出してきているに違いないのだ
次はチョキを出すだろう

俺が次にグーをだせばそれで勝ちだ

確率で言つと

グーが20パーセント

チョキが60パーセント

パーが20パーセント

といったところだらう

だがどうだ

先ほどのように俺の予想を反した行動をとることができるのだ、こ

いつは

さつきの勝負、俺の挑発は成功したといつていいだろう

再び奴を挑発すればパーを出す可能性は皆無になる
しかしそのパーの可能性がチョキにプラスされるのかそれともグー¹にプラスされるのか何パーセントプラスされるのか俺にはわからない
そして考えておかなければならぬのはもしかしたら一度目は通用
しないかもということだ

勝敗的に考えてみると奴はグーを最もだしそのすべてであいこにな
つている

このことは奴も考えているはずだ

奴にとつてのグーはあいこの手だ

この手を再び出してくるとは考えにくく

よつてグーを出す可能性は順番と合わさり最も低くなるだろう

そして俺は今のところやつと全ての手がかぶつている

つまりグーは俺にとつてもあいこの手なわけだ

奴がもしこのこれらのこと理解しているならばグーでは来ないはずだ

すだしチョキかパーを出すはずだ

俺は奴の裏を行くがその裏に奴は行つた

そこで俺は慎重に負けがない手を出すことにした

ズバリチョキ！

順番的に奴が最も出す確率の高いチョキで来たとしてもその次に確率の高いパーで来たとしても俺の負けはない

くくく・・・

この勝負貰つた！

俺は溢れ出る笑みを必死でこらえながら希を見た

奴は腕を組みながら悩んでいるようだった

そうだ悩み！

チョキかパーを出すかでな！

お前は俺の手の中で踊つてるのさ！

希は俺の視線に気づいたのかこちらを見るといった

「決めたぜ」

「ほう」

俺は奴に余裕すら感じられ少しばかりの驚きを感じた

しかし、それが大きければ大きいほど奴の落胆も大きくなるはずだ

「すう」

俺は息を吸いこんだ

そして拳を天に向

卷之二

二人の視線がぶつかる！

その間には誰も侵入することができない！

「けん！」

希が拳を振り上げ俺は力の限り振りかぶる！

そして・・・時はきた！

卷之三

それに呼応するように俺の拳がかざ

結果は・・・

奄がチヨナ

負けた

魔女用の魔の力量

思わず膝から崩れ落ちる

「お、しきーじゅあ俺はやあくドーメンな、」
希が生き生きとメモに注文を書きつける

「なぜ・・・んだ・・・」

「ん?」

3人が振り向く

「なぜなんだ!!!!」

俺は力の限り叫んでいた

教室中の視線が天を仰ぐ俺に集中する

「お前グーチョキパーの順番で出してたら、まじわかりやしー」

そういうつて希は笑つた

俺は・・・燃え尽きた

「なるべく早くなー」

「1つでも忘れたら承知しねーぞ早く行け!」

「伸びる前に頼むぜ」

俺は3人からの声に背中を押され教室を出た

そしてそのまま帰宅した俺への扱いが翌日から見るも無残な物になつたことは言うまでもない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3824q/>

生存率1/2のサバイバル

2011年1月28日09時35分発行